

予告されていた「武漢肺炎」

①

1981年に刊行された「闇の眼」という小説、ホラーとかスリラー小説に分類されるのだろうか、作者は、ディーン・R・クーンツという人気作家らしい。当初はゴリキーだったのが、ソ連の崩壊によって、1996年武漢に変更された。

この武漢の生物・化学兵器研究所からすべてのデータを持って、ある中国人が米国に亡命してくる。この生物兵器は、きわめて毒性が強く、数十時間で全員が死亡する、という設定である。・・・で、この間抜けがうっかりウィルスを拡散させてしまい、緊急事態に陥る。

ラスベガスにシングルマザーがいて、ディレクターとしても有能で、一人息子のダニーと暮らしていた。ダニー少年は、ボーイスカウトの訓練に引率者に連れられ、参加したのだが、ダニーを除く全員が死亡してしまった。ダニーの遺骸は、母親にも見せず、その理由は、あまりにも悲惨だから。(実際には、空っぽの棺だったのだが)・・・結局助かったのは、ダニーだけ。

その後、それまで超能力の片鱗もみせなかったダニーだが、とじこめられていることや、病のひどさに脳の前頭葉が異常に発達して超能力が出現しはじめる。ポルターガイストや奇妙な音を発生させ、助けをもとめていることを母親に知らせようと試みる。米国は広いから、どこにでも研究所は設立できる。ラスベガスの周囲は、砂漠だらけだから、格好の立地である。

この人工ウィルスは、すべての罹患者が亡くなるはずが、ダニーだけが生き残ったため、14回も投与され、脳の組織を検査する、という、人間性の欠片もない連中だが、なかにはまともな人もいる。厳重な警戒網をかいくぐるには、ダニーの超能力が不可欠で、それによって、ダニーも救われる、という小説である。

作者は、いくつかのペン・ネームをつかっているが、危険があったのだろうか。

② シルビア・ブラウン女史が 2008年に”End of Days:Predictions and Prophecies about the End of the World”（世界の終わり：世界のおわりについての予測と予言）を発表したが、2013年に没。この本の中で、「2020年、武漢から重度の肺炎のような病気が広がり、肺や気管支を攻撃し、治療法がなく・・・」「突然消えるが、10年後に再び現れ、そして完全に消え

る。」などと書いている。

かつてのノストラダムスのときには、バカな連中が、文字通りバカ騒ぎをしたが、さすがに武漢肺炎に際しては、沈黙している。②のように具体的な予言ではなく、幾通りにも解釈できるノストラダムスでは、全員が頓珍漢な解釈で、さすがに黙っていてくれるのはありがたい。

- ③ 2011年には、映画 **Contagion**. 豚のウィルスとコウモリのウィルスがヒトの体内に侵入し、呼吸器の細胞や中枢神経細胞の受容体と結合する」ことで、致死性の高い新型ウィルスが発生したという設定。

「恐怖は、ウィルスより早く感染する」

- ④ 「ブランデミック」というドキュメンタリーがある。ジュディ・マイコヴィッツ博士（62歳）という米国人。2冊目が「腐敗の疫病」。

彼女は、80年代に流行し始めた HIV ウィルスを発見したグループのひとりである。ところが論文を書いてもアンソニー・ファウチ アレルギー・感染症研究所長に握りつぶされ、無能とか、盗みを働いた、虚言癖など、さんざん罵倒されるのだが、どうやら本物の研究者らしい。……ファウチを日本が絶賛する理由はよくわからないのだが、Peter Navalo 大統領補佐官が、ファウチに向かって「あなたは、中国からの入国禁止措置にも、当初反対していたではないか」と声を荒げたという。……Navalo は、「米中もし戦わば」の著者である。

2019年末に武漢で発生した原因不明の肺炎は、故意か偶然かはともかく、研究室外にウィルスをまきちらし、わずか数か月で世界中にひろがり、感染者数 2000 万人近く（2020.08.01.現在）、死者数も数十万人（8月1日現在 60 万人）に一気にふえた。中国には、共産党の為だけに働く輩ばかりではない。まともな人間もいる。医師李文亮氏など自ら罹患しながら世間に周知させようとしたところ、共産党から逮捕監禁され、3日目に亡くなった。この人だけではない。各国は入国禁止措置をとったが間に合わなかった。WHO 事務総長は、中国共産党の傀儡。打つ手がすべて共産党の指示によるものだから、何の役にも立たない。姑息にも隠蔽しようと企む共産党政権の

言いなりになって、同じく隠蔽に加担した。武漢のロックダウンを行う数時間前に習近平は口を滑らせ、500万人の武漢人が脱出した。これが、感染に一層の拍車をかけ、Pandemicを惹起する。

古代ローマの政治家・哲学者であるキケロは、「やがて起きる出来事は、事前に影を落としている」

2004年、米情報機関コミュニティの中のNIC（国家情報会議）で、分厚い文書の表紙に「世界の未来図を描く」とある。西暦2020年の予測で、ここに“Pandemic”感染症の世界的大流行との記述がある。スペイン風邪（1918～1919）と同様、一部の専門家は新しい感染症の蔓延は時間の問題と言っていた。このときの大統領が2期目のGeorge W. Bushである。日本では、小泉純一郎総理で、グローバル化を合言葉にしていた。……しかし、感染症のPandemicはグローバル化の最大の障害である。プリンストン大学のNIC議長ロバート・ハッチングスは、今後15～20年にかけて米国が直面するであろう問題を扱っていた。……その結果として2020年のPandemicである。単なる予言者の予言ではない。

つまり、グローバル化にも負の面があり、いつ流れが止まるかも知れない。そのきっかけがPandemicだということである。それを引き起こしたのは、人工のウィルスであり、武漢肺炎である。

この「武漢肺炎」を差別用語だという媚中派もどきの人がいる。なぜなら、あらゆる疾病には、個人や特定の地名をつけないようにするのが世界の趨勢だという。ちょっとずれたのを提示すると、昔はバセドウ病（Morbus Basedowi）と呼んでいたものが、現在では「甲状腺機能亢進症」になっている。この理由の最大のものは、米国では、Graves' diseaseと呼んでいたからである。なぜなら、Gravesの方が早くみつけていて、発表していたからである。……この混乱を避けるために個人の名をつけないようにしているのである。川崎病は、原因不明なのだが、川崎富作博士が発見したもので、コロナ感染で同様の症状を呈した患者が結構みついている。外国人は川崎病と呼び、日本人は、忠実にMCLS（Mucocutaneous Lymph node syndrome）と名付けているのである。最近、黄砂がその原因らしい、といわれている。これも、中国大陸からである。

そうなると、Hodgkin' s disease (ホジキン病) はどうするのだろうか？ 非ホジキン・リンパ腫という名で呼ばれる疾患もある。世界中で、まだ1人か2人かくらいしかみつかっていないものは、とりあえず、人命、地名を使うのが妥当である。とりあえず、そのとき、もっとも使いやすく、みんながわかる病名にすることが主であり、「差別」など、とんでもない欺瞞・言いがかりであることがわかるだろう。・・・・・・これが日本から発生したのなら、日本病で、すこしも差別とは思わない。

念のため、新聞記者はものを知らない、とくりかえしているが、アナウンサーもおなじです。テレビが、「こびちゅー、こびちゅー」とうるさいから、なんのことかとよく聞けば、「媚中」のことらしい。・・・・・・これは「ビチューー」と読むねんで！ 「こーはい、こーはい」もそうで、「降灰」のことらしい。・・・・・・この場合は、「コーカイ」と読みます。

2020.08.04.